

「知られざる郭沫若の諸事について」(6)

【サマリー】

齊藤 孝治

日中戦争が激化し、長期化し始めると国民党、共産党による抗日統一戦線は形骸化し、両党の対立は徐々に表面化して行きました。

共産党に押され気味になっていた国民党や総師の蒋介石は焦り出し、共産党員やシンパの多い対日諜報情報機関、第三庁(庁長郭沫若)を整理、壊滅する方針をあからさまにしたのです。

当然、蒋介石が統一戦線の“旗振り役”として日本からわざわざ迎え入れた郭沫若は、無視される結果になってしまいました。

怒りを胸に秘めた郭沫若は、中国の文人がよく使う「借古諷今」の手法を用い、「屈原」「棠棣之花」「虎符」「南冠草」「孔雀胆」「高漸離」などの戯曲を書き、暗に国民党や蒋介石を弾劾したのです。

本文は抗日戦争下の中国に於ける複雑な政治状況とその中で懸命に生きる郭沫若の人となりについて描いたものです。